心に残る映画

『トランボ　ハリウッドに最も嫌われた男』

2015年／アメリカ／ジェイ・ローチ監督作品

名作に隠れたもう一つの物語

『トランボ　ハリウッドに最も嫌われた男』
発売・販売元：TC エンタテインメント
発売中
価格：Blu-ray 4,700円＋税
DVD 3,800円＋税
ⓒ2015 Trumbo Productions, LLC.
ALL RIGHTS RESERVED

会員　森下 智徳（69期）

オードリー・ヘプバーン（Audrey Hepburn）が，映画史に残る名作「ローマの休日」という映画でアカデミー最優秀主演女優賞を受賞したことは日本でも有名な出来事である一方，同作品の原案者が，1953年に同作品が発表されてから，四十年という時を経て，1993年にアカデミー最優秀原案賞を受賞したことは，ご存じだろうか。

その人物の名前は，本作品のタイトルにもなっているダルトン・トランボ（Dalton Trumbo，1905年12月9日–1976年9月10日）である。

本作品は，第二次世界大戦後，マッカーシズムと呼ばれる反共産主義運動によりハリウッドを追放された後もなお，偽名を名乗りながら脚本家としての活動を続け，数多くの名作を世に残した脚本家ダルトン・トランボの実話に基づく映画である。

舞台は，東西冷戦が始まった1940年代後半から1950年代のアメリカ合衆国。アメリカ国内では，共産主義への危機感が高まり，自国内の共産党員やその同調者を社会から排斥する，いわゆる“赤狩り”が政府により公然と行われていた。

赤狩りによる迫害は，公職者や軍関係者のみならず，ハリウッドの映画業界にも及んだ。アメリカ共産党の党員であったトランボも，弾圧の対象とされてしまう。踏絵の舞台となった下院非米活動委員会の聴聞会に召喚されたトランボは，「あなたは今，あるいは過去に共産党員でしたか」と問われ，信教及び言論の自由を規定する憲法修正第1条を理由に証言を拒んだ。

証言を拒否したことによって，トランボは，議会侮辱罪という罪に問われ，投獄されてしまうことになる。当時，彼はアカデミー脚色賞にノミネートされるなど，ハリウッドの脚本家として確固たる地位を築こうとしていた矢先である。

刑期を終え，出所した後，トランボは，ハリウッドの映画スタジオから事実上排斥されてしまい，自身の名義では仕事ができなくなっていた。そのため，彼は，やむなく偽名を使ってB級映画の脚本を書き，食いつなぐことになってしまった。「ローマの休日」もこの時，彼が友人の名義を借用して執筆したものである。

脚本家として，絶望的な窮地に立たされたトランボではあったが，そんな状況に置かれてもなお信念を貫き，やがてハリウッドの表舞台に華々しい復活を遂げることに…。

以上が，本作品のあらすじであり，エンターテイメント作品としても是非鑑賞していただきたい作品であると同時に，思想を理由とする迫害が当たり前のように行われていた時代の恐ろしさを理解するという意味でも，とても印象に残る作品であると私は思う。

また，本作品の見どころは，何といっても，どんな逆境に立たされようと，自らの信念を貫こうとする不屈の精神と家族や友人に対する優しさを重んじたトランボを，見事に演じる主演ブライアン・クランストン（Bryan Cranston）が魅せるいぶし銀の演技であることは間違いない。